

古代ゲルマン語の Wortstellung に関する一考察

(Verbstellung を中心に)

手 嶋 竹 司

特殊記号

- | | | | |
|------|--|------|---|
| 。。。。 | 詩行の最初の Hebung (強音部) の前に置かれたアクセントのない一箇またはそれ以上の音節。 | (上線) | その語のこの印の部分に Hebung のあることを示す。 |
| ———— | 下線を施せられた語が述語動詞 (定動詞) であることを示す。 | ———— | この印はそれが置かれた語のその部分が韻を踏んでいる Stabsilbe であることを示す。 |
| ———— | 引用文中の語の上に施されたこの印は | | |

略語説明

| | | | |
|-------|----------------------------------|----------|-------------------------------|
| ags. | angelsächsisch | HH. II. | Helgaqviða Hundingsbana Qnnor |
| Akv. | Atlaqviða in grœnlenzca | Hildebr. | Hildebrándslied |
| alts. | altsächsisch | Hm. | Hamðismál |
| Alv. | Alvismál | Hrbl. | Hárbarðzlióð |
| Am. | Atlamál in grœnlenzco | Hym. | Hymisqviða |
| Beow. | Beowulf | idg. | indogermanisch |
| Br. | Brot af Sigurðarqviðo | Musp. | Muspilli |
| germ. | germanisch | O. | Otfrids Evangelienbuch |
| Hdl. | Hyndlolióð | Vkv. | Vqlundarqviða |
| Hel. | Heliand | Vsp. | Vqlospá |
| HH. | Helgaqviða Hundingsbana in fyrri | Þrk. | Þrymsqviða |

(I)

本稿では表題に掲げた問題の史的な記述説明はなるべく差し控えたい。その点に関しては既に K. Fleischmann がその著作において詳述している。従って本稿では共通ゲルマン語から史的段階に入ってから個別ゲルマン語に至るまでの史的過程で主文と副文にみられる定動詞の位置に関して生じた差異対立の発端はどこにあるかという点に焦点をあてて考察を進めることにする。Delbrück の「印欧語比較文章論」(Vergleichende Syntax der idg. Sprachen) で「印欧語では定動詞が文の終末に置かれるのが通常的位置であった」という説を発表して以来多くの研究者によってそれは容認されており、また事実多くの比較文学者によってもそのことを裏づける証拠が出されてもいる。ゲルマン語においても同様一般に終末の位置を印欧語より受け継いだ、これを古代ゲルマン語の文献資料に拾うならば、

Horn von Gallehus :

ek Hlewagastir Hóltingar horna tawido

(私 “Hlewagastir”, Holt の息子, がこの角笛を作った)

Hildebr. 4

sunufatarungo

(父と子が自分たちの武装を整えた)

iro saro rihtun.

Ludwigslied, 45

Gode lob sagêda

(神を称賛した)

Christus und die Samariterin 2

ze untarne, uuizzun thaz,

(われらも知る如く、お昼時に、彼は泉のほとりに腰をおろした)

er zeinen brunnon kisaz

Beow. 4f

Oft Scyld Scëfing

monegum mæg um

(スケーフィングのスキュルドはしばしば仇なす敵ども、多くの宗族から酒宴を奪い取った)

sceaPena Prëatum,

meodo-setla ofteah;

Genesis 686f (Alts. Original. 97. Kain)

Oft siu thes gornunde

sinhîun samad,

(彼ら夫婦は時折心落着かず玉砂利の上に共に立ち嘆き悲しむことがあった)

an griata gistuodun,

もちろん終末の位置が不動のものであったというのではなく、動詞の後になお他の文肢が後続することがあった。

Beow. 677f

Nô ic mê an here-wæsmun

gûP-geweorca

(私は武力にかけてはグレンデルが自らを評価するよりも自分を劣っているとは決して思っていない)

925f

hnāgran tälige

Ponne Grendel hine;

hê tō healle gēong,

stōd on stapole,

(彼は館へ行き、階段の上に立った)

Hel. 378ff

biuand ina mid uuādiu

fāgaron fratahun,

(母は婦人のなかでもとりわけ美しい女性で、その母が彼をとって、衣で彼をくるみ、みごと立派に着飾った。)

Thō ina thiū mōdar nam,

uuībo scōniost,

ここに挙げた例文からも明らかな如く、定動詞の Valenz (動詞価) に欠落している部分を補足する文肢が量的に長い、文肢の一部にその Apposition として立つものが追加されるような場合に、その補足部分が定動詞の後に更に後続することがある。ところでこうした文構成における Wortstellung はもともと共通ゲルマン語の時代にまで遡ることができる。

(II)

共通ゲルマン語の段階では定動詞は一般に終末か、またはその近辺に来ることは前述の如

(汝はまことに明るき光なり)

HH. 42

Þú vart brúðr Grana

á Brávellu,

(ブラーヴェルでは、お前はグラニの花嫁になった)

Hrbl. 31

Góð áttu Þær mankynni Þar Þá.

(その頃そこではお前によき娘たちと知り合い関係にあった)

5

Þat segir Þú nú,

er hveriom Þiccir

(おのおの方にはすべてもっとも心悲しき知らせと思われることを今お前は口に)

HH. II 31

Þic scyli allir

eiðar bíta,

(すべての誓いがお前の身の破滅になるようにしてやる)

Hm. 24

Hitt qvað Þá Hamðir

(ハムディルはそれを喋った)

Hrbl. 34

Ec mynda er a trúa,

nema Þú mic i tryg veltir.

(もしもお前が私に対して忠誠心を裏切るようなことがなければ私はお前を信用することだつてあるだろうに)

Vm. 6

hitt vil ec gyrist vita,

ef Þú fróðr sér

(はじめに私はお前が賢いかどうか知りたい)

これらの動詞は日常言語でも大変よく使われるものばかりであつて、それらの動詞の情報価は僅少であるということから音量並びにそれらの語の音声形体にも縮約という事態を招来することになる。従つてこれらの動詞は情報量を豊富に持っている Vollverb (情報充実動詞) とは対照的に、その機能するといふも軽い繫辞 (Kopula) のような低い価値において働いた。たとい文頭に立つようなことがあつても文脈や、その文全体の志向に大きく係わる Modulationswort (文全体を変調する語、文係数語) として働く力を持ち合わせることはなかつた。文音調 (Satsbetonung, Intonation) の流れに強く作用影響する Vollverb が語形として充足した形態を留め源初的な終末の位置に立つのに対して、情報伝達量の弱少な動詞は文の動きを大きく左右するような文の先頭に立つ語に倚りかかつて寄生する繫辞的な動詞は音調上でも低音域に抑音化されて立つことは争い難い自然のおもむきであろう。こうした背景から自然その音形態も縮約される結果を招く。この前倚的第二位の位置に立つ動詞の位置が主文の構文特徴として一般化され Normalisierung される発条となる機運は文の主語の発達と確立という論理性と歩調を合わせて徐々に盛り上つていった。

リズムの点に關していうならば、もう一つの要素を見逃すことはできない。それは韻律である、ゲルマン語に生来特有の韻律は頭韻法であつた。この頭韻法というのは本来ゲルマンの韻文にとっては単なる詞藻上の綾、紛飾の具であるというに止まらず、ゲルマン語に固有

の本質から生まれたものである。そして個有の言語の特性に一段の生彩を添えるものであった。頭韻法 (Alliteration, Stabreim) とは上述の如く隣接する強音節が相似した音で韻を合わせる韻律のことであるが、それによって詩行の中心的な意味を担う語の語基の音節が一きわ際立ってもち上げられる。頭韻詩の中で定動詞が一般にどのような位置におかれていたかをより明確にするために古代ゲルマン詩に即してしばらく目を通してみることにする。強音節が韻を合わせることによって詩行 (Vers) の連繫系列が支えられ、詩行の構成のまとまりが維持され一種の起承転結に似た作用と効果が働く。詩行の組み合わせと連合のために Anvers (入詩行) と Abvers (出詩行) がそれぞれ頭韻によって結びれて一つの長行 Langzeile) を構成していた。なおこの場合に多くの詩行ではそれ自身アクセントを持たず弱音化された音節が一つまたは数個が第一の強音節の前におかれることがある。これらの最初の Hebung (強音節, 揚音部) の前に置かれたアクセントのない音節は、いわば楽曲の最初の埋め込み序曲に現われることのある不全完小節のようなもので Auftakt と呼ばれている。この問題にはまた後程触れる機会がある。さて次に挙げる例文からもわかるように前倚的動詞形は殆ど常にこの Auftakt (または Anakrusis) に現われるのに対して、Vollverb はそうした Auftakt にはほとんど現われることがない。

Hildebr. 23f

des sid Detrihhe darba gistuontun
fatereres mines : dat uas so fruntlaos man
(その後私の父である Dietrich を恋い慕う心がひしひしと迫った。そのお方はこれほどに寄り
 辺なき孫独人であった)

Musp. 82

lossan sih ar dero leuo uazzon : scal imo avar sin lip piqueman,
(墓塚から重石がとれた。彼に再び生命がやどることになるのだ)

91

dar scal denne hant sprehhan, houpit sagen,
(ここで手が語り、頭がまことを語るであろう)

Hildebr. 50

ih wallota sumaro enti wintro sehstic ur lante,
(私は国の外で17回の夏と冬(星霜)流浪した)

Musp. 33

denne ni kitar parno nohhein den pan furisizzan,
(誰一人あえてその禁令を犯す勇氣はない)

Die Merseburger Zaubersprüche 6

du uuart demo balderes uolon sin uuoz birenkit.
(そこでバルデルの小馬は脚をくじいた)

Hel. 15f

helag himilisc uoord : sia ne muosta heliðo than mêr,
frîha barno frummian,

当面している問題に関係する韻律法の特徴的なものが見受けられるからである。その辺の事情を審らかにするために Edda の中から若干の例文を挙げておく。

Am. 12

hvat Pá varð vitri, er scyldi vilt rista;
 (どうしてあの方がわけのわからない彫りようをなさるようなことがあったのか)

18

hvítabiörn hugðir: Þar mun hregg austan.
 (白熊の夢をお前は見たのだ。東から嵐が起ることだろう)

71

sleit ec Pá sáttir, er voro sacar minni;
 (そうするためのなんの動因もないのに私は平和を乱しました)

Hrbl. 8

segðu til nafns Þíns, ef Þú vill um sundit fara!
 (もしも汝がこの海峡を越えて行くおつもりならばどうかお名前をおっしゃって下さい)

これらの Edda の詩の中の定動詞には特別に強意的に使われている場合を除いては古代アイスランド語の文法体系からみて異常とってよいほど文の終末の方に引き寄せられているという傾向がうかがわれる。がしかし上掲の例文中では前倚動詞は抑音化されて Auftakt に現われる。以上のことからこれらの前倚動詞に前倚的な第二位の位置がかなり一般化の方向にむかって定着しつつあったということを物語るものであるとみてよいのではなからうか。なおそうした機能上の位置と用法とに鑑みてこの前倚的の第二位の位置は一種ある程度規範化された状態にあったのであろう。以下にさらにその裏付けとなるような、またその間の差異を明示するような例文を比較のために並列して引用しておく。

Am. 78

ömm mun rö reiði, ef Þú reynir gorva.
 (もしもあなたがこんなことをしたならば、怒りの久しく休まることもないでしょう)

80

gláða mun Þic minzt, Atli, ef Þú gerva reynir;
 (アトリよ、お前がすべてを聞き及んだら喜んではおられないだろう)

ここにみる二つの動詞、一つは Modalverb の *mun* (Inf. *munu*-werden) と Vollverb の *reynir* (Inf. *reyna*-erproben, erfahren) の位置関係を比べてみると二つの動詞のそれぞれの情報伝達量の相異による機能上並びに文体上に及ぼすところのものと、二つの動詞の性格の違いが明瞭になる。

いずれにしろどのみち上述のことから存在動詞はゲルマン語でははやくから文の先頭に立つ揚音をもつ文肢に倚りかかっていたことが、また一方で Vollverb は古来の印欧語からの伝来の終末部位に依然として位置を占めていた。ところが言挙げ、強調の部位である文頭の位置と、特に Merkmal を持たない終末の部位との間の対立はこのようにして明確化されるに至った。そして第二位の位置への移動とその定式化には、命令文及び疑問文の構文上の特徴が扶助貢献したのと考えられる。

sendoð systr Helio, slícs ec mest kennomc.
 (身内の者を奪われ、財宝を奪取されて、お前たちは妹をヘルのところへ送り届ける。私はそのことを一番悩み苦しんでいるのだ)

Vsp. 8

Tefðo í túni, teitir vóro,
 (中庭で将棋に打ち興じ、彼は気分爽快であった)

24

Fleygði Óðinn oc í fólc um scaut,
 (そのときオーディンは槍を放って敵の軍勢の中に投げつけた)

Hdl. 15

Eflðiz hann við Eymund, æztan manna,
enn hann Sigtrygg sló með svǫlom eggjom;
 (彼は男の中の男であるエヌムンドと結び、自らの力を強めた。そして彼はシグトリュグを冷めた刀で殺めた)

Vkv. 10

Sat á berfialli, bauga talði,
 (熊皮の上に坐って、腕輪をかぞえた)

Prk. 5

Fló Þá Loki, fiārhamr dunði,
 (ロキは飛び、翼が大きな音を立てた)

導入部の Anvers にはほとんどすべて前倚的な動詞があつて、かりにはじめの強音節 (Hebung) に立よふことがあつても頭韻を踏むことはなく、また、普通には前倚的に弱音部第二位に立っていることを知る。しかもこういうときにも Vollverb には事情は大きく異なっており、殆どの場合頭韻を踏んで強音部位 (Hebung) におかれている。このことは取りも直さず、前倚的な述語動詞は強勢を持つことなく文頭域に立ち、しかも先頭の語に寄りかかって接合している。このようにゲルマン語古来の頭韻詩法においてもわれわれの主張が認められる。このような根拠から共通ゲルマン語の時代に既に文頭域に述語動詞をもつ文の型と、文末域にそれをもつ文の型の文体論的、文法的対立がかなり固まっていたことが確認されるのである。このことについて、K. Fleischmann は Relieftheorie (対比対照論) という枠組を立てて次の様に説明している。「動詞はある事象を前面にまたは背景に押しやる力をもっている、すなわち主要となる事象、もしくは副次的事象として表出することができる。このとき動詞は単に時称表現の意味しかもっておらず、論理的に上位、下位という序列づけをすることではなく、背景に立つ文も自立した文であると考えなければならない」と説いているがしかし、いま筆者は、K. Fleischmann が述べている説明のほかには古代ゲルマン語には文頭域に動詞を持つ強調の文型によって告知されるべき事象を鮮明に新たに伝えるというのと、文末域に動詞をもつ叙述形式によって滑らかに言表陳述が完結されるという文体論的、文法的な機能が作用していたと併せて考えたい、定動詞が文末に立つ文ではそれ自身のうちに完結し自足安定した文となつて落ち着くというということは文音調上からも考えられることである。

このようなことは上述の命令文の場合についても妥当することを古代ゲルマン語の文献資

の如く強めのために文の先頭に立っても頭韻を踏むことは起りえなかったという点において際立った特徴を示す。こうした日常的な動詞のもつ位置の特性が論理的主語の確立という歴史的傾向と併行して一段とその勢を強め、次第に動詞全般に亘ってこれを文前域に引き寄せる原動力としての作用と効果をもつに至ったものと考えられる。

はじめにも述べた如く、主文、副文における動詞の位置の対極の対立の史時過程を通時的に概観することは本稿の意図するところではなく、ひとえにそうした文法体系の成立の端緒となったところに探りを入れることを当面の目標としている。

古代ゲルマン語の詩人たちは印欧語以来の比較的自由的な Wortstellung、語の配列を徐々に歴史的時代に向っての方向をとりつつあった言語の駆流を先取りして彼らの作詩上の技術的作法の一つとして効果を發揮させている。たとえば起伏のない平坦な叙述に際しては定動詞は文末域に、起伏の大きい高揚した叙述においては敢えて標準的な規範を越えて文頭域に位置させている。このことは強調的語法ではいずれの文肢も一般に文頭域にずらして引き寄せるといふ傾向、とりわけこの趣向はある状況に表現の焦点が集中的に向けられているときとか、ある一定の聞き手、または聞き手集団に集中的に意が注がれているときというような場合には容易に起りうることである。そうした強調的な状況がこうした位置の対立を生むのに大きく関与したのであろう。さらにはゲルマン語、とくにドイツ語の性格に強く内在している枠構造化への底流が他のもろもろの要因と相補して共働しているという事実も見逃せない。枠構造も文または文肢を一定の枠の内、「まとまり」と安定を確保し保証するのを助けるものであるということを考え合わせてみる必要がある。かくして主文、副文の間にある連合と関連が誘発されて両文のそれぞれの特徴が明瞭に確定されるようになった。さらにはこうした文法が体系化されるに及んで、当初の文体論的な機能は後退していった。文法上の主語の確立と、主語の根幹に脈々と流れる強靱な底流が史的展開の過程の裡に潜在せる力を収斂していく作用と相い乗りしていたところに著しい発展の基礎があった。

本稿にて取り扱って来たような調査研究では単に統計的な資料による調査に基づいてその動勢傾向を測るというわけにはいかない。その理由は統計的に優勢な構文が必ずしも言語の発展の史的段階においてノーマルな構文であり、そこからの展開であるということにはならないからである。従ってより古い前の状態をわれわれ研究者に教えてくれるような古体の遺影なり残影を顧慮する必要がある。

その点ここに資料として使用した古代ゲルマン語の韻文資料はより古いゲルマン語のもっていた語法の残照を留めているし、時にはさらに古い言語状況を残しているという理由からそこに現われる特異な現象なり、事実を考合勘案し、正しい処理の仕方をもって当れば古いものなから新事実を発見する切掛ともなりうるのである。

Zusammenfassung

Immerhin wird aus den altgermanischen poetischen Denkmälern ersichtlich, daß die Dichter sich die germanische, freie Wortstellung ihren künstlerischen Zwecken dienstbar machten, wenn auch beschränkt. Bei ruhiger Darstellung steht das Verbum finitum im Germanischen eigentlich nahe dem Ende des Satzes. Im Gegensatz dazu steht das Verbum finitum am Anfang, wenn es einem Vorgang Nachdruck verleihen

soll. Und das rührt daher, daß bei emphatischem Gebrauch jedes Wort oder Satzglied in der Regel an die Spitze des Satzes rücken kann, und daß dies unter anderem beim Verbum finitum besonders charakteristisch ist in Sätzen, die situationsgebunden und an einen bestimmten Partner oder eine bestimmte Gruppe gerichtet sind. Bei unserem Thema ist Rücksicht darauf zu nehmen, daß neben anderen Faktoren auch die Tendenz zur Umklammerung besteht, die dem Germanischen von Hause aus innewohnt, wie aus den oben angeführten Beispielen zu entnehmen ist. Dadurch wird eine gewisse Abgeschlossenheit gesichert. So konnte zwischen beiden Sätzen mancherlei Zusammenhang hervorgebracht werden, und das führte zur Entwicklung zweier Satztypen, nämlich des übergeordneten und des untergeordneten. Zugleich wurde damit die Verbstellungsordnung beider Satztypen graduell systematisiert. In dem Maße, wie die Systematisierung sich herausbildete, tritt die stilistisch-grammatische Funktion zurück, wobei — wie dargelegt — die enklitischen Verben für die Entwicklung des Hauptsatztypus wirksam waren. Nach dem Rhythmus liegt die Enklisis von Natur musikalisch tief; aber es ist doch merkwürdig, daß die Triebkraft durchaus zäh und intensiv durchgedrungen ist. Woran liegt das? Es liegt daran, daß die Entwicklung, auf der Entwicklungsrichtung der Sprache beruhend, nun einmal ständig in Bewegung ist.

(注)

- (1) Fleischmann, K. : Verbstellung und Relieftheorie. München 1973 Münchner Germanistische Beiträge. Band 6.
- (2) Antonsen, E. H. : A Concise Grammar of the Older Runic Inscriptions. Tübingen 1975
24頁参照 7. Syntax 7.1.1.
It is clear that the normal, unmarked order in indicative sentences is S O V; in imperative ones, V O, as PG (Proto-Germanic) and PIE (Proto-Indo-European) なお統一て7.1.2を参照
- (3) Wackernagel, J. : Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung auf dem Gebiete der indogermanischen Sprachen, begründet von A. Kuhn. 23,457
- (4) Hirt, H. : Handbuch des Urgermanischen. III. Teil § 206
- (6) Fleischmann, K. : 上掲書 143頁参照

VERZEICHNIS DER BENÜTZTEN LITERATUR

I. 刊 本

- Behaghel, O. : Heliand und Genesis. 8. Auflage, bearbeitet von W. Mitzka Tübingen 1973-Altdeutsche Textbibliothek. Nr 49
- Braune, W. : Althochdeutsches Lesebuch. 15. Auflage, bearbeitet von Ernst A. Ebbinghaus Tübingen 1969
- Erdmann, O. : Otfrids Evangelienbuch. 6. Auflage. besorgt von L. Wolff. Tübingen

1973

- Heyne, H. : Beowulf, besorgt von L. L. Schücking. 18. Auflage Paderborn 1962
Neckel, G. : Edda. Die Lieder des Codex regius nebst verwandten Denkmälern. I. Text.
Vierte, umgearbeitete Auflage Heidelberg 1962

II. 参 考 文 献

- Behaghel?O. : Deutsche Syntax, eine geschichtliche Darstellung. 4 Bde Heidelberg 1928
Erdmann, O. : Untersuchungen über die Syntax der Sprache Otrfrids. Halle 1874 Nach-
druck der Ausgabe Halle 1874 76. Georg Olms 1973
Erdmann, O. : Grundzüge der deutschen Syntax nach ihrer geschichtlichen Entwicklung.
Stuttgart 1886
Fleischmann, K. : Verbstellung und Relieftheorie. München 1973 -Münchner Germanisti-
sche Beiträge. Band 6.
Hopper, J.P. : The syntax of the simple sentence in Proto-Germanic. Mouton 1975
Lehmann, W. P. : Proto-Indoeuropean Syntax. Austin and London 1974
Lehmann, W. P. : The development of Germanic verse form. New York 1971
Hirt, H. : Handbuch des Urgermanischen. 3 Bde. Heidelberg 1934
Havers, W. : Handbuch der erklärenden Syntax. Heidelberg 1950